

「大町桂月と、龍頭が滝」（その2 桂月が選ぶ日光の滝ベスト10：前編）

東照宮で有名な日光には、「日光四十八滝」「日光七十二滝」と呼ばれるほど、たくさんの滝があります。荘厳な文化遺産と、多彩な自然美があることから、国立公園に指定されています。

大町桂月は、松笠の龍頭が滝について、「この滝を日光に持って来ても、第十番以内には入るだろう」と書いたことを、前回、紹介しました。ということは、彼は、日光の滝について、第一位から第十位までの、名瀑リストを持っていたはずで

そこで今回のテーマは、「桂月が選ぶ日光の滝ベスト10」です。

桂月は、明治22(1889)年、日光にひと月近く滞在しますが、その時のことを『一蓑一笠』に収められた「日光だより」という旅行記の中に、次のように記しています

「滝という滝は悉（ことごと）く見尽し候（そうろう）。（中略）日光は滝の名物、七十二瀑と申し居れども、実際見るに足るべきものは二三十に候。

その中にて、華厳が滝の主に候。（中略）その次には、霧降、湯滝、龍頭滝、これらが先づ一流に候、裏見になると、第二流に候。裏見の次には相生滝、次に羽黒滝、次に慈観滝、次に日月滝、次に寂光滝、小生が見て面白いと思いたるは以上の十瀑に候。赤菴山にかかれる七滝は唯（ただ）細長きのみにて、面白からず候。」

この記述から、日光の滝の中で桂月が推すのは、まず華厳滝（けごんのたき）が一番。その次は、霧降の滝（きりふりのたき）、湯滝（ゆたき）、龍頭の滝（りゅうずのたき）。裏見の滝（うらみのたき）が続き、さらに、相生滝（あいおいのたき）、羽黒滝（はぐろだき）、慈観滝（じかんだき）、日月滝（じつげつだき）、寂光滝（じゃっこうのたき）、だということがわかります。

これが、桂月が選ぶ日光の滝ベスト10です。



次回は、この10瀑の中から、いくつかの滝を紹介したいと思います。

さて、最後に、明治初めの頃の龍頭が滝を、眺めてみましょう。

左は、明治12(1879)年出版の『島根県管内地誌略』 出雲国地誌略の中にある、龍頭が滝を描いた挿絵です。

水量が豊富で、滝音が聞こえてきそうです。

よく見ると、左側に祠（ほくら）、灯ろう、石段のようなものが見えます。

その下には、向こう岸に渡るための、橋のようなものも見えます。

この本が出版されてから、20年ほど後、大町桂月は龍頭が滝を訪れます。滝を見上げ、橋を渡って向こう岸にたどり着き、石段を登って、祠の前で滝の水音を楽しんだのかもしれないですね。

清水清太郎 著『島根県管内地誌略』出雲国地誌略、
清水清太郎 明12-13 国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/766200>
(参照 2025-01-11)